

# シーカー 6

S E E K E R 6

---

---

安部飛翔  
HISYOU ABE

## 主な登場人物

### リリオ

「鷹の目団」に所属する小妖精。幸運値が高く、財宝を見つけるのが得意。

### ホーク

探索者パーティ「鷹の目団」のリーダー。カリスマ性でメンバーを纏めるお調子者。

### フルール

次元を越える能力を持った時空竜。異世界から来訪し、スレイに懐いている。

### スレイ

本編の主人公。18歳。  
シークレットウェポンの双刀を操る最強剣士。二つ名は「黒刃」。

### ディザスター

EX+級の力を誇る欲望の邪神。蒼く滑らかな毛並みをした狼の姿。

### シャルロット

五千年を生きる闇の種族の「吸血姫」。超一流の魔導科学研究者。

### タマモ

「傾世」の美女と呼ばれる九尾の狐。スレイの前世とは旧知の仲だった。

### グルス

闇の種族の国で宰相を務める魔猿族の長。過去の因縁から人間を憎悪している。

### クズハ

タマモに付き従う霊狐。タマモの事を何よりも大事に考えている。



1

ディラク島——樹海

どこまでも深い樹海。

只人なれば足を進める事すら不可能であろう険しい道のりを、スレイ一行は、整えられた街道を歩むが如く、苦もなく進んでいる。

とても人とは思えぬような、軽やかな足取りだ。

標となる物など何一つないと言うのに、迷うことなく、ただ感覚のままに突き進む。

いくら進んでも変化のない、密林だけが続く風景——普通の人間ならば、とうに感覚を狂わされていいる筈だ。

しかもこの樹海には、SS級相当探索者すら惑わす高度な幻術と、時空間を操作し、樹海の奥深くには入り込めないようにする術が掛けられていた。

だがスレイにとっても、欲望の邪神“ディザスター”にとっても、時空竜フルールにとっても、

そんな物は何の意味もない。

彼らに干渉しようとする術式は、難なく無効化されている。加えて、進むべき方向は、気配により簡単に見定められた。

本来この面々であれば、一々歩く必要すらない。感じている気配の元へ、一気に跳べばいいだけだ。しかもそうすれば、スレイ達を監視しようとして後を付けてきていた「忍」達を撒く事も容易だっただろう。

そうしなかったのは、この状況がスレイにとって遊びのようなものだからだ。それも悪童の行う悪戯の類に過ぎない。

スレイは今、わざわざ自分達を招待するかのように術が解除された樹海の入り口から外れて、道なき道を進んでいる。しかし、ただ無造作に森の奥深くに踏み込んだ訳ではない。

デイラク島全土に張り巡らされている「眼」と、この樹海のみ張り巡らされている「眼」の正体——前者は『九尾の狐』の眼であり、後者はその傍に居る霊狐の眼である事を、スレイはあっさり見破っていた。

実は樹海の外に居た時から既に、密かにそれら二つの「眼」を惑わし始めていたのである。

つまり、「用意された入り口から、開かれた道を進んでいくスレイ達」という幻の姿を狐達に「視」せる、などという真似をしているのだ。

こうして、類稀な幻術の使い手を、逆に幻惑して楽しんでいる。

デイズスターとフルールは、そんな子供じみた悪戯に全力を尽くすスレイを呆れた目で見ていた。スレイはふと立ち止まり、樹海の内外に感覚を広げる。

「忍」達は、スレイの行動を受けて、二つのグループに分かれて行動していた。

馬鹿正直にスレイ達の後を追って樹海に入った「忍」達は、たちまち樹海に張り巡らされた幻術と時空間操作の術に惑わされ、樹海の外に放り出された。それでも懲りずに何度も挑戦を繰り返した末、やっと追跡は不可能だと悟ったようだ。

そのグループの「忍」達は暫し呆然とした後、樹海を監視する為の一部を残して樹海から去った。主であるノブヨリに報告するために戻る事にしたのだろう。密偵のプロらしい切り替えの早さだ。

任務失敗の報告をせざるを得ないとはいえ、そんな彼らはまだ幸運な部類だと言える。

もう一方のグループの「忍」達は、スレイの為にわざわざ用意された入り口から樹海に入った。このように複数の手段でアプローチし、目的の達成確率を上げようというのは、彼らのような生業の者ならば当然の事だ。

彼らは今、九尾の狐が時空間を操作し削り上げた循環する時空の歪みの中で、完全にループさせられ、行けども行けども変わらぬ景色の中を、延々と歩み続ける羽目に陥っている。

スレイ達の為に用意された入り口に、招かれざる客として無遠慮に踏み入った「忍」達への軽い罰として、スレイが自分の元へ辿り着くまでは、ループの中に閉じ込めておこうと九尾の狐は考えているのだろう。

しかし実際は、スレイ達は用意された入り口や道などを無視して、幻術と時空間操作の術が張られた樹海の只中を強引に突つ切り、真つ直ぐに九尾の狐の元へと向かっていった。

スレイがこのように邪道な方法で迫っていると知ったなら、九尾の狐はすぐに樹海を常の状態へ戻し、**「忍」**達はすぐさま幻術と時空間操作の術に惑わされ樹海から放り出されるだろう。

それはつまり、少なくとも無限に続く時空のループの中からは解放されるという事になる。

今現在、**「忍」**達が時空のループに閉じ込められているのは、スレイが遊びで九尾の狐の**「眼」**に、「用意された道を進むスレイ一行」などと**「幻」**を見せているからだ。

**「忍」**として自己の命を投げ出す事も厭わない訓練を受けているとはいえ、そのような理由で終わりなき道を無意味に歩み続けなければならぬとは貧乏籤に過ぎるな、などと考えつつも、スレイには、**「忍」**達を解放してやる心算など毛頭なかった。

それよりも……と、自らの感覚をより研ぎ澄まし、脳裏に浮かぶイメージを明確にする。

九尾の狐と霊狐、二つの気配が感じられる場所があった。

そこだけ草木も生えず、硬い土がむき出しになっている。あたり一帯が大きく開けており、まるでちよつとした広場のようだ。

その中心に存在するのは巨大な木造の屋敷——それがスレイ達の目指している場所である。使われている建材は、どうやらただの木ではないらしい。相当な樹齢の神木の類であり、しかも未だ生きている。

**「識」**ろうと思えばもつと深い情報も得られたが、スレイはその必要はないと判断した。

それよりも注目すべきは、先程から感じている二つの気配のうち、途轍もなく強大な方が屋敷の中から発せられている事だ。それこそが九尾の狐に違いない、とスレイは断定していた。

その姿を仔細に**「視」**る事も可能だが、そんな事をしては勿体ないと却下する。

九尾の狐は、その力もさる事ながら、恐るべき美貌でつとに名高い。それ程の**「美」**ならば、最初は直接この目で見なければならぬ。

屋敷の門前には、九尾の狐とはまた別の気配があった。

こちらが霊狐だろう。

その気配は九尾の狐と比べて明らかに微力であるが、それは比較する相手が悪いだけである。霊獣の格で考えれば、かなり高位の存在であると分かる。

この霊狐の姿も、スレイはやはり**「視」**ずに済ませる。霊狐が人化した化生であり、しかも女だと分かったからだ。

九尾の狐程ではなくとも、相当の美貌である事は必定。初対面は、やはり生で見て楽しみたい。しかし霊狐が門前に立っているという事は、スレイを出迎える為に待っているのだろう。

わざわざ樹海に入り口を用意し、ご丁寧に屋敷までの道を開くなど、招き入れる準備を施していたのだから、間違いあるまい。

それに何より、九尾の狐の**「眼」**は、デリラク島中に張り巡らされている。スレイ達が九尾の狐

の元にやってくる事は、大分前から分かっていた筈だ。

スレイ自身、クランドとの戦いを終えて落ち着いてからは、九尾の狐の視線を常に感じていた。いや、それ以前も感じてはいたが、気にしていなかっただけで、死闘の興奮が覚めた今、気にする余裕が生じたと言った方がより正確である。

一人、色々と納得するスレイ。

それにしても、屋敷の周囲はかなり広々と開けている。そこまで辿り着いた時、スレイ達が木々の間から突然姿を現したとしても、霊狐は大して驚くまい。

それではつまらない、とスレイは軽く頷いた。屋敷がある広場の手前の木々の間——霊狐の視界の外から眼前へと一瞬で移動し、驚かせてやるうか。

それは容易い事だ。何せ九尾の狐にも霊狐にも、今スレイ達がどこに居るのか感知する事は不可能。だが、霊狐が驚いて少しでも反応したならば、九尾の狐はすぐに何事かと探り、本物のスレイ達を見つけ、今現在「視」ているスレイ達が幻だと気付くだろう。

それは避けたい。ならばどうするか……。

答えは簡単だ。

まず、スレイが森から飛び出すと同時に広場に結界を張り、九尾の狐が屋敷の周囲に関しても仮想の世界を「視」るように仕向ける。

高度な魔法に概念操作を組み合わせ、色々と工夫をすれば、たとえ神獣であっても見破れない結

界を、スレイなら軽く創り上げられる。

そして何も伝えなくとも、ディザスターとフルールは難なくスレイの動きに追従し、共に結界内に入ってくれるだろう。しかしまあ、こんな悪戯一つに無駄に力を注ぐとは……：我ながらなんと言うか、どうしようもないな。

自分で自分に呆れるスレイ。

と同時にスレイは、これもまた必要な息抜きか、何せこれから先、真面目にやらなきゃならない事が山程あるからな、とも考えた。

クランドによってスレイの魂に埋め込まれた「種」。そこから伝わってくるのは、クランドの思想や希望、そして成し遂げようとしていた理想——本当にあいつは、どれだけ物を背負おうとしていたのか、と改めてスレイは驚嘆する。

クランドがこの世界に選んで来るまでに、せめてその一部くらいは代わりに実現しておかなければ、合わせる顔がない。

それが、今のスレイにとって最も大きなモチベーションとなっていた。

とはいえ、スレイの場合は、クランドのように真面目に辺倒になれる訳ではない。

今までと同じように、最強を求め、全ての美女・美少女を求める——そうした欲望自体を捨て去る事は出来ない。

今回のように、機会があれば息抜きがてらの悪戯もする。尤も、神獣相手の悪戯を息抜きと呼ぶ

のは、この世界であつてもスレイぐらいのものであろう。

……なんにせよ、だ。

これでデリラク島の問題はひとまず片が付くとして、次は大陸全土に関わる件で色々動かなければならぬ。まあ、やる気自体はそれなりにあるのだが、やはり気が重い事には違いない。

ふと、クランドの手によって魂の中に埋め込まれたものについて思いを巡らせるスレイ。

“種”というのだから、芽吹き、成長し、やがて何かに成るのだろうか。

スレイからすれば、たとえそれによってクランドからの影響を強く受けたとしても、己の存在の本質まで完全に変質させられる事はないという自信がある。まあ、表層の一部くらいは変質するかもしれないが。

はてさて、どうなることやら……極一部の例外を除き、その気になれば“全知”となる今のスレイにとって、将来が「未知」であるというのは実に興味深い事だ。

ただ、この状況を楽しみながらも、僅かに不満もある。

スレイにとつて一番の望みは、いずれ還つて来たクランドと再び戦う事である。二番目は、邪神達を悉く打倒する事。三番目は、あらゆる美女・美少女と呼べるモノを口説き落とす事だ。

一番の望みを叶えるには、クランドの帰還を待つしかない。三番目は他の色々な事と並行しながら実行可能なので、特に問題はない。

しかし二番目だけは違う。スレイがクランドの代わりに世界の基盤を整える為に動くならば、邪

神達と戦う時も世界への影響を考えねばならない。余計な手間が掛かり、暫し機会を待たなければならぬだろう。

ままならないな、と溜息を吐く。

そんなスレイの肩に、木漏れ日が降り注いだ。鬱蒼と茂る森の中ではあるが、屋敷に近づくにつれ、樹木もまばらになっていく。

スレイは広場の手前に着いたと悟り、周囲一帯に結界を張った。

そして、屋敷の門前にいる霊狐を“視”据える。と同時に、スレイは先程“視”た霊狐の眼前に既・に・いた・瞬間移動と呼ぶのも生温い、存在そのものの時空間座標の置き換えだ。

目を見開いて啞然とする少女。

そう、霊狐はまさに少女と呼ぶに相応しい、十代後半の人間の姿をしていた。

身長はごく普通だが、スレイが縁あつて出会う女性達の例に漏れず、スタイルは抜群である。

ふむ、これも縁に恵まれているという事だろうな……などと考えるスレイ。

そのうえ、少女は極めて整った顔立ちで、規格外の美しさだった。足下まで伸びるサラサラの白髪が一際目を惹く。肌は抜ける程に白く、切れ長の赤眼とコントラストを成している。

その身に纏うのは、恐らくは侍女服だろう。デリラク風だが何やら色々アレンジされているようだ。

眼福、眼福、と思ひながら、スレイの期待はやおら高まる。

この少女は霊狐——つまり獣の変化の中でも、格は決して低くはないが、高いと言う訳でもない。今は隠しているが、尾の数は四尾と見抜く。

スレイが「識」り得る知識では、九尾の狐すら超える圧倒的な神通力を得た『天狐』は、九つの尾を持つという説と、四つの尾を持つという説があった。

尾の数こそが力の象徴とも言われるが、力極まれば、尾は必要がなくなり減っていくという話もある。天狐より格が上とされる『空狐』は何尾なのか不明で、尾が存在しないとされている。

更には、空狐と天狐の序列が逆転している説すらある。

スレイの全知を以ってして、何故このように不確かな情報しか得られないのか——。

それは、絶対的に確定した存在である「真の神」を除いて、この世界の神々、そして異世界の神々、神獣から妖怪、魔物の類に到るまで、ある程度以上の格を持った高位存在は様々な面を併せ持つからだ。一が全で在り、全が一で在り、唯一の確かな正解という物が存在しないのである。

伝承によれば、遙か昔、九尾の狐は異世界よりこの世界に転生した。そしてその転生の際に、ヴェスタの影響を受けて存在が変質したという。

確かに今も九尾の狐というカテゴリーに属したままなのだが、もはや元の世界で言う空狐を遙かに超えた格に到っているのだ。

目の前にいる少女も、九尾の狐と同じ世界から転生してきたのだと、スレイの眼力は見抜いていた。しかし彼女が何の変哲もない普通の霊狐に過ぎないと理解し、一瞬困惑するもすぐに気付く。

あの失われし名持ちの邪龍でさえ、召喚者たる魔術師の干渉がなければ、ヴェスタの力により変質する事はなかった。そして何よりの証拠に、真紀やセリカ、出雲といった、身近にいる異世界からの来訪者達も変質などしていない。

つまり、スレイがこれから会おうとしている九尾の狐のように、変質している方が例外なのだ。

心中で苦笑しながら、目の前の霊狐に対する第一声は何としようかと考える。何せ規格外の美女だ。やはり自分のモノにしたい。

とはいえ、初対面からあまり踏み込み過ぎるのも逆効果となる。

奇をてらつても仕方がない、結局は無難な挨拶が一番か、と結論を出したスレイ。

「どうも。既にご存知かと思うが、俺はスレイという者だ。道の幻術が解かれていたので、招待されていると思い、訪ねさせてもらった。君の名前を聞かせてもらっても構わないだろうか？」

しかしこの時、スレイはあまりに迂闊なミスを犯しているながら、それに気付いていなかった。わざと思いつき驚かせる登場を演出しておきながら、その効果までは考慮外だったのだ。

もともと籬の外れた存在のスレイではあるが、つい最近、クランドとともに濃密過ぎる時間を過ごし、その緊張が解けたばかりで、更にねじが緩んでいたのだろう。

「ふあっ!？」

奇妙な声を上げる霊狐の少女。

「ふあっ!？」



思わずオウム返しするスレイの目の前で、少女は腰を抜かしたように倒れかける。

「おっと、大丈夫か……っ!？」

素早く手を掴んで少女を支えたスレイだが、思わず絶句してしまった。

「あ、ああああ……」

赤い瞳を潤ませ、絶望的な声を上げる少女——その侍女服の股間に染みが現れ、地面にまで広がっていったのだ。驚きのあまり、隠していた狐耳と四尾の尻尾も飛び出してしまっている。

「あ、その、えーと」

流石に何も言えず硬直するスレイに、後方からやって来たディザスターとフルールが、呆れたような、非難するような声を掛けた。

『主、いくらなんでもやり過ぎだろう?』

「つていうかさ、お化けとか暗殺者とか、そんなのも比較にならない程唐突な登場をしておいて、普通に挨拶して……しかもその娘、幻影まで見せられて、道から来ると思ってたんだよね?」

そう。そもそもスレイは巧みに幻術を用いて少女を騙し、不意討ちを喰らわせたのだ。しかも並大抵の技術ではない。神ですら軽く暗殺できるレベルである。

少女として、霊狐であるからには自分の感覚に自信があつたはず。その感覚を裏切つての急襲に耐性がある訳もない。

「そうか。兵器として改造された探索者よりも、自然な霊的進化によって生まれた霊獣の方が、よっ

ぽど生物として普通の身体機能を有しているのか、やつてしまったな」

自らの迂闊さと、最悪のファーストコンタクトに、思わず額に手を当ててぼやくスレイだった。

## 2

あれから暫し経ち、スレイは現在の状況に少々困惑していた。

スレイの胸元にすがり、頬を染めながら、潤んだ瞳で真っ直ぐ見上げてくる霊狐の少女——名をクスハというらしい。耳や尻尾をもちや隠そうともせず、どこか甘えるように擦り寄ってくる。

衣服の汚れや地面の染みは、既に消えてなくなっていた。

「霊獣は格が低い」と言うのはあくまで神獣と比較した相対的な話であつて、クスハとてそれなりに強大な力を持った存在である。自分の粗相の始末を付けるなど簡単な事だ。

問題はどうしてこのような状況になったかである。スレイはそれを思い返す——。

まずスレイは思いっきり睨まれた。そして問答無用で襲われた。

まあ、当然だろう。全てスレイが悪い。スレイ自身、少女をここまで驚かせてしまった事に罪悪感を覚えた程だ。

スレイは霊狐の少女が涙を流しているのを見て、自分の心が痛むのを感じた。そして自らの変化に気付く。今までのスレイならば、何があるかと最後に帳尻を合わせればいいと考え、軽く流していただろう。スレイの精神制御は完璧すら超えているので、心の痛みを認識したとしても、それすら制御の内ではある。

だが、痛みを心を感じる——というのはスレイにとって、異常の極致だった。これもクランドの置き土産か、とスレイはどこか嬉しいような、憎らしいような不思議な心持ちになって苦笑した。

それを見て、クズハの攻撃はいつそう激しさを増した。馬鹿にされたと誤解したのだろう。

が、霊狐がいくら強大な力を持っているとはいえ、所詮スレイからすれば話にならないレベルである。軽く受け流し、適当にあしらって見せる。

クズハは、自分の力が全く通じないので、今度は本格的に泣き出してしまった。

スレイの困惑も極まる。

スレイは相手の性格、成熟度などを、見ただけで容易く推し量れる。それによると、クズハは初々しい見た目に反し、精神的には相当成熟した大人の女性だった。元来の性格も、淑やかで、落ち着きがあるようだ。

そのクズハがまるで子供のように泣きじゃくっている。

スレイは慌ててクズハの元に歩み寄り、慰めの言葉を掛けた。

と同時に、この状況を逆に利用して口説き文句を口にする——何せこれだけの美少女だ、スレイとしては口説かずにはられない。

クズハは、人間を警戒する小動物のように怯え、同時に怒っている。そんなクズハを相手に、酷い目に遭わせてしまった事を詫び、本当に一步一步、心の距離を縮めて信頼を積み上げ、更に好意すら勝ち取っていかねばならないのだ。

スレイは徹底して地道に、忍耐強く、優しく誠実に聞こえるような言葉を重ねていく。時にはスレイの言動の所為で弱った相手の心の隙を突く、ある意味卑劣な急所攻撃もしたりする。

スレイの巧みな誑かしは功を奏し、クズハの心の防壁は崩れていった。そして名前を聞き出し、名を呼んで親しみを感じさせながら、少しずつスキンシップを図る。最初はほんの少し頭を撫でただけでも警戒された。

それをまた口説き文句の攻勢で緩め、そつと僅かにクズハの身体に触れる。

そんな事を繰り返して、本当に気の遠くなるような時間をかけて苦勞を重ねた結果が現在。

狐耳や四尾の尻尾に触れ、撫でたり握ったりしても、クズハは大人しくされるがままになった。スレイを受け入れたのだ。それどころか、うっとりとした表情でスレイを見上げ、目を潤ませている。

この甘えっぷりはどうだろう。いや、美少女に甘えられれば当然嬉しいのだが。

クズハが本来、落ち着いた大人の女性だという見立てに間違いはない。スレイの眼力は絶対だ。

そして本来、クズハがこのような甘えた姿を見せるのは、先程まで交わっていた会話から察するに、クズハが仕える九尾の狐——クズハにとつては主でありながら姉にも等しい存在で、その名をタマモという——と一緒に居る時に限られるようだ。

つまり、もはやクズハは、心から慕っているタマモと同じくらいスレイを信じているという事になる。いや、それは違うか。信頼、という意味では、スレイはタマモに遠く及ぶまい。

クズハがスレイにこんな姿を見せるのは、いわゆる恋愛補正という代物だろう。現に、異性に対するあからさまな好意が見え隠れしている。

この状況自体は嬉しい。スレイが全身全霊を尽くして目指した理想的な結果だ。

だが、多少時間を掛けたとはいえここまで惚れ込まれると、流石に戸惑いを覚えた。

聞いた話によると、タマモとクズハがこの世界に転生してから接した他人といえば、馴染みのない世界で途方に暮れていた二人をこの樹海の奥に匿い、住居を用立てた男だけらしい。

タマモとクズハの二人は、以来ずっと樹海の奥に引き籠もっていたというから、他人に対する免疫がなく、無防備であつても仕方ない。

そして存在の格の違いか、タマモはその男の事を覚えているが、クズハは全く記憶にないらしい。これらの点を考慮すると、クズハのこの免疫のなさにも納得がいくというものだ。

しかし、とスレイは眉を顰める。

タマモとクズハにこの地を与えたその男の名は、オメガ、というそうだ。

これも因縁か、と思う。

それはともかくとして、話を戻すと、今スレイを最も困惑させているのは、甘えてくるクズハに対して良心が咎める、という事であつた。

クズハの甘えるような表情は、そもそも自分がクズハを驚かせ、その心の隙を突いて口説き落とした結果である。普通の人間ならば、良心が咎めて当然だろう。

だが、そもそもスレイは普通ではない。欲しいと思つた女を口説くのに、手段を選ばない。悪事に手を染めるとか、姑息な真似はしないというだけだ。

スレイはありとあらゆるシチュエーションを演出し、相手の心理状況を利用する。その時々において最適な場所を用意し、最適な口説き文句を聞かせ、手間も時間も全てを惜しまずにモノにする。クズハを口説き落とすプロセスでは、まあ多少は卑怯な方法を取つたかもしれないが、悪事を働いたという程ではない。ギリギリセーフだろう。

だから、良心が咎めるというのはおかしい。第一、良心などという感情は、とうの昔になくなつた筈だ。

それが何故こうなつたのかと言えは、と考えるまでもない。答えなんて決まりきっている。

この良心もまた、クランドが残したものでらう。

またも苦笑を漏らすスレイ。

はてさて、これから先自分はどれ程変化するのだろうか、と。

いかなる変化もクランドから齎もたらされたものだと思うと、全く悪い気がしない。まあ、そこが最大の問題かもしれないが。

そんな事を考えていると、クズハが不思議そうな表情でスレイに尋ねた。

「スレイ様、どうかありませんでしたか？」

相変わらずスレイに甘えながらも、その口調は、スレイの読み通り、落ち着いた大人の女性の風情げいであった。

そんなギャップに感じ入りつつ、スレイは答える。

「いや、なに。大切な男の事を考えていただけさ」

その言葉に、嫉妬しつとの表情を浮かべるクズハ。

スレイの言った「大切な男」とはクランドのことだが、クズハは「大切な女」と勘違いしたのだ。

スレイはわざと誤解を生じるような言い方をして、クズハの機嫌を損ねた。思わず呆れ顔になるディザスターとフルール。

しかしスレイは、敢えて誤解を解こうとしない。実際多くの女性と関係を持っているのだから、その方が都合がよいと考えたのだ。

自分を嫌うのではなく、嫉妬するように仕向ける。次に嫉妬を和らげるために、あの手この手で機嫌を取る。更には、自分の女性関係を徐々に明かし、スレイへの好意はそのままに、その女性関係には諦観しつかんを抱かせるように持っていく。

こうしてスレイは、自分にとって都合の良い状況を作っていくのだ。

クズハがいかにか高い知性を持ち、永い時を生きる霊獣とはいえ、その知性は人間のその延長線上にあると考えて問題ない。人間も、永い時を生きる霊獣も、その心理操作に於いては何の変わりもない。ただ霊獣の方が、難易度がやや高いというだけだ。

スレイにしてみれば、自分に惚れた女を嫉妬させたり懐柔かいじゆうしたりというのは、日常茶飯事さはんじである。ディザスターとフルールが呆れたような目で見るのも、いつもの事だ。

しかし今は、やや良心の呵責かせきを感じるようになってしまった。クランドのやつ、余計な事をしてくれたものだ。苦々しく思うと同時に、嬉しくもなるといふ、厄介な心理状態に再び陥るスレイ。

だが、いつまでもクランドに気を取られていても始まらない。

拗ねて甘えてくるクズハの耳や尻尾を手で愛でてやり、彼女の気を落ち着かせた。

スレイは、クズハが泣き止み嫉妬が収まってからも、屋敷の方に彼女の意識が向かわぬよう、延ひいてはタマモの事に思考が到らぬよう、巧みに心理誘導をしていた。

勿論もちろん 容易く出来る事ではないが、スレイならば不可能ではない。

やがてスレイは、そろそろ頃合いかなと見計らい、こう聞いてみる。

「それでだな、クズハ。屋敷の主である神獣、九尾の狐の事なんだが、タマモで良かったな？ その女性に会いたいんだが？」

途端、ビクンツと身を跳ね上げるクズハ。

見るとその顔は青ざめ、身体は微かに震えている。

これまでのスレイとの遣り取りを、第三者——九尾の狐に見られているという意識が全くなかったのだから当然だ。

ただ、九尾の狐を恐怖しているのではない。羞恥とも違う。なんとも言い表しがたい感情だ。恐怖や羞恥などというありきたりな感情を持つには、クズハがタマモに抱く尊敬と親愛の念は大きすぎるのだろう。だから単純な言葉では表現できないような複雑な心情になる。

「ど、どうしましょう、スレイ様？ わ、私、あんな醜態を。そ、それにお客人をご案内もせず……」哀れにも震えながら、クズハはスレイに絶るように問い掛けてくる。

これは、スレイにそれだけ心を許しているという証拠だ。

スレイがあらゆる手段を用いて、心理操作をしながら口説いたのだから、当たり前と言える。もはや、完全に惚れさせた。

しかしそれがまた心に痛みを生む。クランドの残したモノの中でも、これは本当に厄介だ。

一先ずこは、心に痛みを与える良心に従い、クズハを安心させてやる事にした。

弱々しく取り纏るクズハをもうしばらく見ていたい、などという邪な欲望を今は押し殺し、スレイは告げる。

「大丈夫だ。何も心配する事はない。タマモには、お前の今までの行動は何も見えていないから」

「う、嘘ですっ!! タマモ様の“眼”はこのデリラク島全土に届くのですっ!! 屋敷の前で起きた

出来事が見えていない訳がっ!!」

その事ならスレイも“識”っている。

だからこそ、その“眼”を惑わす為に結界を張った上で、このような馬鹿げた悪戯をしているのだ。なので軽く尋ねる。

「それじゃあ聞くが、クズハ。何故タマモは全く動かない？」

屋敷に居る筈のタマモは、今のところ、全く以って何の反応も示していない。

「え？」

慌てて、屋敷の方を振り返るクズハ。

「え？ えっ？」

スレイはタマモと対面した時に初めてその姿を見る為に、敢えて今は“視”ずに、気配を感じるに止めている。しかし、クズハはタマモの気配ではなく、その姿を直接“視”ていた。

そしてクズハは、今気付いた、というように、困惑に顔を歪めた。

そんなクズハを見て、これは惜しい事をしたかな、とスレイは思う。確かに規格外の美少女が、なりふり構わず弱々しい姿や素顔をさらけ出すというのは、それだけでも堪らないものがある。

普段であれば、間違いなくそのクールな容貌のままに、タマモの従者として完璧な所作を見せた事だろう。という事は、そんなデキる女としてのクズハを見てから今のクズハと接したなら、ギャップのせいでより可愛らしく感じられたはずだ。

そんな事を考えているスレイの心を、または良心の刃が突き刺してきた。

いかな物理攻撃や精神攻撃、その他あらゆる種類の攻撃を完全に無効化できるスレイだが、流石さすがに自分自身の内側からの攻撃には弱い。

どうにもこうにも勝手が掴めないスレイ。

クズハは訳が分からないといった様子で尚も問い掛けてくる。

「ス、スレイ様っ!? これはいったいどうなってるっ!?」

「ああ、屋敷に結界を掛けさせてもらっている。今のタマモには、用意された道を素直に歩いて来る俺達の姿と、門前でそれを待って静かに佇むクズハの姿が見えているだろうさ」

「う、嘘？」

驚愕の表情を浮かべ、首を左右に振るクズハ。神にも匹敵する神獣であるタマモ——その力を最も良く知るのは、傍そばに仕え続けたクズハなのだ。信じられないのも無理はないだろう。

だが舐めてもらっては困る、とスレイは思う。

たかが神、いわんや神獣が何程のものだと言うのか。

スレイに勝てる相手など、あらゆる世界にも、その外にも存在しない。

スレイ相手には、どんな力も兇戯じぎに等しい。

だから笑って言う。

「嘘じゃないさ。ほら」

結界を操作してみせるスレイに、クズハは驚き目を丸くした。

「タマモ様が見えなくつ、いえ、屋敷の中が全く……」

「なんだったら、好きな物を見えるようにしてやろうか。その特別製の“眼”にな？」

それくらい造作もないといった感じで告げるスレイを、啞然として見返すクズハ。

「そ、それじゃあ本当に？」

「ああ、だから先刻からそう言ってるだろう？ だいたい、今更驚いてもらっても困る。そもそも出会い頭であしつにクズハを驚かせたのだから、クズハの“眼”を軽く誤魔化したって事じゃないか」

肩を竦めるスレイに、クズハも最初の出会いを思い出し、恥ずかしがって頬を染めた。そして、

呆然とした口調で尋ねる。

「……スレイ様、貴方はいったい何者なのですか？」

「“絶対最強”の“人間”様さ」

しかしクズハは首を横に振りながら否定した。

「嘘です。探索者といえども、人間がそこまで強大な力を……」

あり得ない、と表情で語るクズハだが、スレイは少しばかり天を見上げて呟く。

「さて、幻術でタマモに“視”せている俺達の姿も、そろそろここに辿り着く頃だな。折角こま  
で仕掛けたんだ、無駄になっちゃあつまらない」

『主よ、またやる気か?』

「さっきので懲りなかったの？」

「ディザスターとフルールが呆れて言う。」

その二つの声を聞いて、ビクリと身を震わせるクズハ。

ディザスターとフルールの存在に気付いてはいても、スレイにはばかり意識が向いていたので、今までは気にしてなかったのだろう。スレイの計り知れぬ力を実感しただけでなく、二匹を改めて見て、自らには理解できない規格外の相手だと知り、思わず怯んだようだ。

スレイはニヤリと笑い、ディザスターとフルールに答える。

「大丈夫だ。神獣ともなれば、流石に肉体も通常の生理的反應を超越している。先刻みたいな事にはならないさ」

「あ、あの？ どういう事でしょう？」

思わず問い掛けるクズハ。

クズハはスレイ達の会話が全く理解できず、困惑するばかりである。

またも心の痛みを覚えるスレイ。何かにつけて良心が痛むのは厄介だな、と思いつつ、そんな事はおくびにも出さず、平然とした顔で告げる。

「ん？ どういう事か？ 簡単な話さ。俺はこれからタマモを不意打ちするんだよ。何も気付かせず、いきなり正面から乗り込んでやるのさ。要は、さつきクズハにやった事と同じだな……ああ、それについては何度も繰り返すが、やりすぎてしまい悪かった。完全に俺の配慮不足だった」

真摯に謝罪するスレイ。

スレイの知り合いがこの光景を見れば、ほとんどの者がスレイの頭がどうかしてしまったのではないかと思うだろう。だが当然、クズハは普段のスレイを知らないから、そんな事は分からない。

そして驚かされた事も、醜態をさらした事もどうでも良いとばかりに、主であるタマモの身のみを案じ、詰め寄ってくる。

「そんなっ!? タマモ様に対して、私にしたのと同じ真似をするなど、あつてはならない事です。」

あの方は、そのような悪戯心で汚して良い存在ではっ!!」

クズハのタマモに対する敬愛の念は、男に対する恋愛感情こときで揺らぐような物ではなく、もっと高いレベルにあるのが容易に見て取れた。

母や姉に対するような甘えのような感情も見受けられる。

まあ、彼女らが共に過ごしてきた時間、そしてその関係性を考えれば、それだけの想いの深さも当たり前ものだろう。

いくらスレイがあらゆる女性の心理を解し、最も効率的に攻略していく術を心得ているからと言つて、悠久の歲月をかけて密接な関係を築き、育まれてきた信頼には到底太刀打ちできない。

だから、微かに笑い、クズハを安心させる為にこう告げる。

「なに、心配は要らん。九尾の狐であるタマモは神獣の中でも別格の存在だ。その身体の構造からして探索者以上に生物レベルを超越している。クズハが心配する必要もない程の超越種だ。それは、

ずつと共にあったクズハが誰よりも良く知っている事だと思うが？」

「それは……そうですわね」

スレイの言葉に得心がいったのだろう。

落ち着きを取り戻し、姿勢を正すクズハ。その表情も、最初に見たクールな表情に戻っていた。

そしてクズハはスレイに対し、こんな疑念を投げ掛けてくる。

「強大な力を持ち、幻術を得手とするタマモ様をも惑わす結界を張るなど、驚きの一言に尽きますが……しかしスレイ様。いくら屋敷に結界を張っていると云っても、スレイ様自身が結界の内部に入ってしまったら無意味ではありませんか。屋敷に押し入り、タマモ様を不意討ちするなど、夢のまま夢だと思えますが？」

本来の話し方であろう冷静な口調である。

その言葉の節々に滲み出る、タマモへの絶大な信頼。タマモを誇る様子が垣間見え、可愛いと思うと共に、申し訳なくも感じてしまうスレイ。なぜなら――。

「すまないクズハ。屋敷内部で結界が意味を成さないという、その前提は成り立たない」

「え？」

クズハはまたも表情を崩し、キョトンと無防備な顔を覗かせた。

そんなクズハの耳や尻尾を愛でたいという衝動を抑えながら、スレイは続ける。

「正確に言うと、俺は結界を『張って』いるのではなく、既に屋敷の周辺から内部にまで、完全に

結界を『浸透』させているんだ」

「嘘っ!？」

驚愕に目を見開くクズハ。

一般に、対象の周囲に結界を張るとか、結界で覆って内部を完全に作り変えろと言うのなら、理解の及ぶ範疇だ。高等な技術ではあれど、出来る人には出来る、と思える。

だが、結界を浸透させるというのはそもそもどういう意味なのか？

スレイが言ったのは、対象範囲にある素粒子の一粒一粒に到るまで、完全に結界を構成する――対象全域を、結界そのものと化した素粒子で埋め尽くすという事だ。

高等とか、超高等とかいうレベルの話ではない。言葉で言い表せる範囲を超えた絶技だ。

クズハは暫く考え込んでいたが、ようやくスレイの言葉の意味を理解したらしい。

慌てて屋敷を振り返り、懸命に『眼』を凝らす。真偽を確認しようとしているのだろう。

しかし、何ら『視』る事は叶わなかったようだ。

クズハは、困惑の表情でスレイを仰ぎ見た。

「あの、スレイ様。このような言葉、お客人に対し、何より貴方様個人に対し失礼と承知の上で伺います。本当にそのような術を行使されているのですか？ 私の『眼』には、そのような様子は『視えない』のですか……」

そういう結果になるのも、まあ当然だ。スレイの術技は『霊眼』程度で見破れるレベルではない。



スレイは安心させるように微笑みを浮かべてやる。

こうしてワンクッション置いてやる事で、クズハは落ち着きを取り戻す。

クズハが冷静になったのを確認し、スレイは質問に答えた。

「結界が周辺一帯に完全に浸透している事は、間違いない。だがクズハに分からなくても、恥に思う必要はないぞ。何せこの結界技法は、『霊眼』は勿論、遥か上のランクの『神眼』であつても見破る事は至難の業わざだろうからな。この結界技法を容易く見破れる者など、成長する『眼』である『心眼』を遥かなる高みにまで成長させた者か、もしくは『真なる神眼』を持つ者だけだろう。現に、いくら予期せぬ不意打ちで術を行使したと言つても、『神眼』を持つタマモでさえ、結界の浸透に全く気付いていないだろう?」

「いったいスレイ様は何者なのですか? 先日刹那せつなのみ出現したという、タマモ様ですらその実態を把握できなかったと語られた異常なまでの力の高まりが、スレイ様とクランドなる者との決戦の、ほんの僅わずかな余波に過ぎないという事は、タマモ様より伺つております。タマモ様ですら計り知れぬというその力、私わたくしきが理解できるはずもありませんが……しかし、それにしても、これはあまりに異常に過ぎるか?……」

本当に、訳が分からないといった様子のクズハ。

スレイはそれを見てやはり可哀想に思つてしまふが、一つだけ絶対に訂正しなければならない事がある。よつて決然と告げた。

「一つ勘違いを正しておく。今の俺の力は、クランドとの戦いの後の搾りカスみたいな物だ。命をかけてクランドと戦つたあの時に比べれば、こんな結界技法など、それこそ見戯しげぎにも及ばん」  
「っ!?」

そう聞いて、耳も尻尾も逆立さかだてるクズハ。

ああ、また驚かせてしまったか。申し訳ないとスレイは思うが、こればかりは何をおいてもはつきりさせておかねばならない事だった。

スレイにとつて、クランドとの戦いは何にも勝る尊とうといものだ。この程度の技法と同列と語られるなど許しがたい。

スレイは気付かぬ内に、闘志すら解放していた。

慌あわてて自らを鎮しずめるスレイ。

すると後ろから、呆れながらも諭さとす声が聞こえてくる。

『主は、あの男の事になるとムキになり過ぎる』

「行き過ぎだよね?」

そんな二匹の声を無視して、スレイはクズハを宥なだめるように、優しく告げた。

「それじゃあ、早速行つてみようか。結界の浸透の効果については、実際に進入して不意打ちしてみればはつきりするだろう?」

「は、はこ」

僅かに緊張を解き、頷くクズハ。

それを確認すると、スレイは屋敷の門へ向かって歩き出した。

「お、お待ちください、スレイ様!! スレイ様はお客様なのですから、私がお案内を!!」

「いやいや、それじゃあ不意打ちにならないだろう? なに、内部の造りは全て分かっている。問題ない」

理屈にならない理屈を言い残すと、スレイは無造作に門を開き、突き進んで行く。

クズハも慌てて後を追う。半ば呆れつつ、ディザスターとフルールがのんびりと続く。

屋敷の中に入ったスレイの目に映ったのは、ディラク風の床や壁、それもかなり古式のしつらえだった。

屋敷の構造を既に把握しているスレイは、部屋と部屋を仕切る襖を次々と開け、タマモが居る一際大きな部屋へと突き進んで行った。

後方のクズハは、スレイの言った通り、どこまで進んでもタマモが反応する気配がないことに驚愕の表情を浮かべた。スレイの結界技法によりあらゆる知覚機能が誤魔化され、本当にタマモはこちらに全く気付いていない。

スレイは、目的の部屋に辿り着くと、一気に襖を開け放った。

「たのもー……」

ふざけた口調で呼び掛け、中に踏み込んだスレイだったが、思わず絶句していた。

そこでスレイが目にしたのは、言葉にならない程美しい存在だった。美そのものと言うほかない存在が、キョトンとした瞳でスレイを見つめていたのだ。

どのような美的感覚の持ち主であっても、ただ美しいと認めるしかない美。

これはただ美であり、能力でも技術でもない。よって、敵の能力や技術に対してスレイが駆使する自動無効化も効かなければ、任意無効化も意味を成さなかった。

それ以前に、たとえ無効化が通じたとしても、それでどうにかなるレベルの物ではないと断言できる。

現にようやく追いついたディザスターとフルールでさえ、そこに在る美を前にして硬直している。更に遅れて到着したクズハですら、普段から見慣れているはずなのに固まっていた。

スレイだけは絶句こそすれど、硬直などはせず、最初から冷静に観察し分析していた。なるほど、圧倒的というのも生温い美だ。まさに美の極限。

これに比べれば、エルフのエミリアやハイエルフのティータですら足下にも及ばない。今まで見た美しいものが全てが霞む程だ。

その美しさは容姿のみならず、内面からも滲み出て、強烈な波動のように襲い掛かる。並の人間ならば、見ただけでその目を潰し、全てを投げ捨ててひれ伏すだろう。

……しかしスレイにとつては、そう考察する、ただそれだけの事だった。

クランドと共に、魂の階梯を駆け上がり、果てなき高みへと到り、尚どこまでも昇り続けていこ

## 立ち読みサンプル はここまで

うとしたスレイなのだ。

戦いが終わり、道程は一時中断されてしまっているが、あの刻自分達が放っていた魂の輝きに比べれば、今日にしている圧倒的な美でさえも物足りない。そう断言できる。

そんな事を考えながらも、スレイは冷静に美の化身を観察し続けていた。

キョトンとスレイを見つめる瞳は瑠璃色である。目は大きく切れ長ながらも、慈愛に満ちた雰囲気<sup>たふさ</sup>が漂い、安らぎさえ感じさせる。

神の手を以ってしても不可能だろうと思われる程、完璧な配置によって顔のパーツが構成され、最善のバランスを保っている。

肌はどこまでも白く、瑞々しく生氣に満ち、健康美を感じさせる。その肌理細かさは喩えようもなく、大理石や絹になぞらえるのも馬鹿らしい。

今、タマモは布団の上に寝そべり、枕にしなだれかかって、落ち着いた輝きを放つ金髪を広げている。その様は世にも美しい敷物のようだ。彼女が立ち上がったなら、髪は足下を超え、床に届いて広がるだろう。

身長は、クズハよりやや低め。寝姿からそう見て取るのは、スレイにとって容易い事だ。

逆に胸はクズハよりも二回りは大きく、それこそが最善のバランスであると思わせる形で、絶妙なボディラインを描いている。

脚も長く、そのラインも見事なまでに美しい。

